

更級の旅

2

千年以上にわたり人口に膾炙してきた郡という地域で「まとまれ」と言われれば「それもそうかな」という気持ちになるでしょう。実際、郡会議員は村々の議員から選ばれていました。郡議員はそれによって村民を郡の考えの方向でまとめる責任を負ったわけです。

し、それが皮肉にも更級郡意識を薄めさせていくことにもなります。明治政府の強力な中央集権化に伴い、県庁の所在する長野市に吸いつけられるように合併していき、篠ノ井は長野市の大字の一つになりました。

時代となると、郡は事実上、崩壊し、一つのまとまった地域の呼び名となりました。江戸時代の文書では「信濃国更級郡〇〇村」などの表記がありますが、実際は藩に属していました。これを明治政府が復活させたのです。それまでの郡の区画としては広すぎるものには東西や南北、上下の言葉をつけて分割しました。長野県では筑摩は東西、佐久と安曇は南北、伊那、高井、水内は上下に分け、更級、埴科、小県、諏訪はそのままの名称で計十六郡としたのです。そしてそれぞれの郡に役所が置かれました。



松本与喜さん
(松本佑子さん提供)

反面、その過程で郡内の村々は自治体としての力を持ち、郡役所は一九二六年(大正十五)、廃止されます。しかし、昭和三十年前後の「昭和の大合併」で、更級郡の村は大岡村と上山田町だけにになり、その上山田町も昨年九月に更埴市と戸倉町と合併し、大岡村だけになっていました。

▽娘時代に覚えた？
明治から大正にかけての更級郡長たつ津崎尚武は県内で最初に郡の広報啓発機関誌「更級時報」を発刊し、村の領域を越えた郡民、国民としての自覚を持つてほしいと発刊の理由を記しています。当時、為政者の間では日本は欧米列強の植民地になりかねないという恐怖が一層大きくなっており、日本人は井の中にとどまらず、大海を知ることが生きのびるのにも必要だという気持ちが強かったのだと思います。繰り返しになりますが、内山さんがこの歌を作ったのは昭和二年(一九二七)。著書の中で「障子二本の大きさの更級郡白地図の上に、それぞれの村の形に切り抜いた色紙を一人一枚(村)ずつ、村数の歌に合わせてはりつけて地図を作った」と書いています。このときすでに郡役所は廃止されていますが、子どもたちに自分の村にとどまらないうちの視野と地域の歴史的な一帯感を持たせるための教材にしたのではないのでしょうか。

▽薄まる郡意識

更級郡役所は塩崎村篠ノ井(現長野市上篠ノ井)に置かれました。欣浄寺です。この一帯は江戸から善光寺に向

けて分割しました。長野県では筑摩は東西、佐久と安曇は南北、伊那、高井、水内は上下に分け、更級、埴科、小県、諏訪はそのままの名称で計十六郡としたのです。そしてそれぞれの郡に役所が置かれました。

更級郡の村数は 二町二十六カ村
稲荷・篠ノ井始めとし 先づ数えん南より
村上方石上山田 更級八幡桑原や
大岡日原に信級と 牧郷更府に信田村
信里塩崎川柳も 栄共和に中津村
川中島に青木島 真島の隅から小島田や
稲里村と御厨は 残してならぬこの二つ
西の寺尾に東福寺 これにて二十六カ村
(内山憲太郎さん作)

明治維新とは言っても、村々はまた今で言うような自治体の機能がありません。それを廃藩置県できた県がまとめるには、数が多すぎて目配りが聞かない。実際、言うことを聞きそうにない…それが県と村々の間に郡を置いた大きな理由だと私は思います。

かう北国街道と、木曾方面から善光寺に至る北国西街道(善光寺街道)が交

井の蛙大海も知る

ので、明治の初期までは郡内で一番の人の往来があったところ。篠ノ井追分という地点です。

それが一九二三年(大正二)、現在のJR篠ノ井駅近くに移ります。東京と日本海をつなぐ信越線が敷設されたのが契機です。篠ノ井駅を抱えていた布施村が、政治的・経済的な力を持つようになったからです。内山さんの「村数の歌」の「篠ノ井」とは、布施村とその周辺の村々の合併でできた新しい町の名前です。しか

村々を鉄道唱歌に乗せて

郡は今では町村の名前を束ねる地名として地図に載っているくらい。新聞では住所表記をする際に郡名は書きません。調べました。鎖国を解いて江戸時代が終わり、欧州や米国に引けをとらない国家になるための統治のしかけだったことが分かりました。

▽歴史的な単位

郡は七世紀中ごろ、中国の政治の仕組みを取り入れ、中央集権国家の行政区画のひとつの単位として規定されました。更級郡は信濃国の十郡の一つでした。武士が政治の実権をにぎる鎌倉



の往来があったところ。篠ノ井追分という地点です。それが一九二三年(大正二)、現在のJR篠ノ井駅近くに移ります。東京と日本海をつなぐ信越線が敷設されたのが契機です。篠ノ井駅を抱えていた布施村が、政治的・経済的な力を持つようになったからです。内山さんの「村数の歌」の「篠ノ井」とは、布施村とその周辺の村々の合併でできた新しい町の名前です。しか

歌の存在を覚えてくれた松本与喜さんも、旧信田村の灰原地区の生まれ。内山さんがこの歌を作ったのは一九二七年で、当時二十四歳。このとき与喜さんの十六歳なので教え子ではないでしょう。しかし「学習発表会で披露した四年生も今や七十歳。この年配の諸君の口には、いまだにこの歌が残っている」と内山さんが記していることからすると、娘時代の与喜のさんが、子どもたちが村のあちこちで楽しそうに歌っているのを聞いていて覚えてしまったのかもしれない。

発行 二〇〇四年十二月十二日
編集 さらしな堂
(代表・大谷善邦)
〒三八九・〇八一三
長野県千曲市大字若宮二一八四・六
(旧更級郡更級村)